

所長だより第46号 平成28年6月14日

希望の船

We love BIWAKO

「みずうみに 学んで世界の 明日をみる」

滋賀県立びわ湖フローティングスクール
〒520-0047 大津市浜大津5丁目1番7号
<http://www.uminoko.jp/>

「カッター活動の醍醐味」

【所長 青木 正士】



今年度もカッター活動のシーズンがやってきました。6月から10月末まで行われるカッター活動は、児童の思い出に残るフローティングスクールならではの特色ある活動です。

ところで、「うみのこ」に搭載されているジュニアカッターボートは10人乗りですが、小学5年生の児童用に特別に製作されています。通常のカッターボートよりも小さく、オールも軽く短めにできています。

それでも、児童にとってオールは重く長く、うまく扱えずに苦勞している様子をよく目にします。初めてのわくわくする体験ですが、これは大きな試練です。オールが水から抜けないうまになってしまふ「はらきり」の状態では、漕ぐこともできませんし、ボートが進んでいけば後ろに転倒してしまうこともあり危険です。1本でもオールが水の中に入ったままでは、ブレーキを常にかけているのと同じなので、カッターボートのスピードは一向に上がらず、舵も効かないので漂流してしまうことにもなりかねません。

指導法としては、オールの操作として、まずブレードの向きは豆腐を切るようにするよう教え、オールを上下させることでブレードを水中に自在に入れ抜くことができるように練習すると自信がついてきます。

つぎに、オールが水から抜けた状態で、漕ぐ前の「よい」の姿勢をとることです。上手な艇長さんは、最初からこの「よい」の姿勢をそろえさせ、全員のオールが宙に浮いていることを確認してから「いち！」と漕ぎ始めの号令をかけています。一漕ぎごとに全員がそろふことを待っていれば、協調して漕ぐことになるのです。大事なことは、早く「よい」ができた児童も遅れている児童を待つ気持ちを持つこと、遅れている児童も「よい」の位置へ早く戻すコツをつかむことです。指導者からの励ましの声かけ、コツをつかむアドバイス、うまくできたときの賞賛の声かけが、児童の意欲を高めていくのです。

近年、児童が漕ぐよりも副艇長や艇長がオールを持ち、一本漕ぎで進んでいる様子が見られますが、気象条件が良ければ早くから児童が漕ぐようにして、なるべく活動できる時間を多くとってあげてください。

岸から遠く離れ、琵琶湖の広さを実感できるところまで自分たちの力で漕ぎ出してみると、「ここまでできた」という達成感とともに、雄大な琵琶湖を感じる余裕も生まれてきます。間近に見る琵琶湖の水は、岸で覗いているよりも水が澄み渡り、水中の水草やその間を泳ぐ魚をみることもできます。時間的な余裕、気持ちの余裕を持つことができれば、カッター活動はますます充実していくのです。

指導者講習会でもお聞きいただいておりますが、何度も繰り返し申しますが、カッター活動ではオールを揃えて漕ぐことが重要で、そのためには児童全員が「よい」の状態にそろふまで待つから号令をかけることが指導のコツとなります。思い出に残る安全で充実したカッター活動となるよう、是非実践してみてください。